

幻の“響庵”^{ひびきあん}

谷村 彪

ここに一冊の本がある。題して「ジャズ喫茶に花束を」。ジャズ好きのレポーターが知る人ぞ知るジャズ喫茶（9店）を訪問し、その店とジャズレコード、オーナーとジャズメン達とのかかわりについてまとめたものである。

これを手にしたのは今から7、8年前盛岡の大通のさわや書店。新幹線の時間待ちで肴町から大通をぶらぶらしていたとき、店頭で偶然手にしたものである。

目次を開いて目についたのは、一関・ベイシーと藤沢・響庵。“ベイシー”が一関にあることは以前から知っており、機会があればぜひ行ってみたい店であった。ここ“ベイシー”のアンプは客席を圧巻するが如き凄まじいダイナミックな音を出し、私達はコーヒーを前にお互いの声も聞き取れずに、ただアンプから伝わってくる強烈なサウンドを聴き入ることしかできなかったのを覚えている。メンバーの一人がオーナーと交渉し持参のレコードをかけてもらいご満悦のようであった。

さて、話をもう一軒の店“響庵”に戻そう。神奈川県藤沢市鶴沼海岸4-15-2、これが“響庵”の所在地で、家から自転車で15分である。「ジャズ喫茶に・・・」を読んでいくと、地元のジャズ愛好家や響庵オーナーの過去を知っている人たちがわざわざ訪れているという。

オーナーの大木俊之助さんは1932年生まれで、1964年から93年まで神田・神保町で“響”というジャズ喫茶を開いていた。私の持っている大木さんのCDの文中から冒頭を引用すると当時の神保町の雰囲気がよく伝わってくる。

「靖国通りと白山通りの交差点を包むようにく神田神保町>がある。ここは明治大・日本大・専修大・電気大・・・小学館・集英社・有斐閣・岩波書店、学生と本の街である。交差点北東の一角、150メートルぐらいの両側に、安くて旨い食べ物屋が10数軒集まっている小さい通りがある——街の人は<人生通り>と呼んでいる。靖国通りからひとつ北寄りの裏道みたいなのが、堪らなくいい」

こんな雰囲気の中で1964年11月5日、レコード総数236枚で“響”は開店し、1993年12月31日の閉店までの29年間多くのジャズメン、ジャズファンとの交流を深める。

1995年藤沢に引っ越してきた大木さんは98年に“響庵”を開店する。

そのキッカケはというと「自分が毎日コーヒー飲みたいし、ジャズも聴きたい。当時小冊子にエッセーを連載していたのだがジャズを聴きながらそれを書ける部屋があったら・・・という気持ちもあった。『湘南海岸の風にのせて』という湘南の風物詩を絡ませながらCDを紹介するエッセーだったが、一方ご近所でジャズ好きな方がいたら一緒にコーヒーを飲みながらジャズを聴きたいという気持ちも大きかった」（「ジャズ喫茶に花束を」から）とのこと。

私が“響庵”を知ったのは、この本を手にした時だから今から7、8年前。店もオープンして7年



ぐらい経ち、ジャズ好きの仲間たちで話が弾んでいた頃だろうと思う。

そのうちに行ってみようと思いつつ2、3年が経ってしまった。ある夏の暑い盛り、住所番地を手に自転車で場所を探し回るが、探しあてることが出来ない。閑静な住宅街のなか“響庵”という看板が見当たらないのである。何度か後に、番地を確認して目の前の住宅を見ると、ごく普通の住宅の玄関先に“COFFEE & JAZZ HIBIKIAN”という看板があった。ついに発見。

場所を確認してからしばらく行く機会がなかった。というより、場所を確認したのでいつでも行けるという気持ちの方が強かったのかもしれない。

そして再訪したのは今から数年前だったろうか、「美味しいコーヒーを飲みながらジャズを聴こう」とジャズ好きの友人を誘ったのである。

ある春のポカポカ日和の午後、私と友人は今日こそは・・・という気持ちで“響庵”の玄関前に立つ。しかし、目の前にあるのは「本日休業」という冷たい表示版。「金、土・日・祝日のみ営業」とのことで、私達が行ったのは月～木曜日ということになる。電話をして確認すれば済むことなのにウカツであった。

その後すぐ行けばよかったのだが、そのうち、そのうちに・・・という気持ちで、再訪しようと思った時にはすでに閉店していたのである。(2009年3月閉店)。残念至極。

まさに幻の“響庵”となってしまった。

この話には後日談がある。

一年ぐらい前から地元の音楽好きが集まって月一回レコードを聴く会を開いている。ジャズ、ポピュラー、クラシック・・・自分の好きな曲をレコードで聞きながら昔話に花を咲かせようという訳だ。秘蔵のレコードを持ち込む人、気に入ったアーティストのレコードがあれば聴きに来る人など毎回5～8人ぐらいの人たちが集まる。“なつかしの名盤愛好会”という。定例会は鶴沼海岸の貸席でビール、ワイン、冷酒などを傾けながら約2時間余り、毎回、曲にまつわる話で場は盛り上がる。

去年(2012年)の11月だったろうか、その会でアートプレーキーの「モーニン」を聴きながらふと、幻

の“響庵”の話をする、隣の席にいた小山さんが「大木さんだったら、うちの隣だよ」という。

「エッ、だったら『ジャズ喫茶に花束を』とCDを持って行って大木さんのサイン貰ってきてくれない・・・」と気軽な気持ちで頼むと、小山さんも即OK。

そして一か月後の会にサイン本とCDを持ってきてくれる。本の“響庵”レポートの冒頭部分に「ジャズは好奇心と観察力です 大木俊之助 2013.1.13」、CDジャケットは神田神保町「響」のカラー写真であったがここにも「大木俊之助 2013.1.13」とサインをしてくれる。そのうえ、簡単な便りと一冊の本が添えられていた。

最後にその大木さんからの便りを紹介して幻の“響庵”を締めくくりたいと思う。

「谷村様 せっかくご近所にお住まいでしたのに、申し訳ありませんでした。東京・神田神保町で“響”を30年営業して、藤沢では10年ほど“響庵”と改称して続けてきましたが、2009年3月で完全に廃業いたしました。いまでも時々「今日は何時からやっていますか？」などお問い合わせなど頂き、ご迷惑をおかけしています。

お預かりしたCDのジャケットは93年?に東芝EMI(現在のEMIジャパン)から出したという前代未聞のタイトル(“BLUE NOTE AT THE HIBIKI” 神田神保町「響」大木俊之介のブルーノート)ですが、CDショップで何のジャンルに入れてよいか迷ったそうです。「ジャズ喫茶に花束を」の“響庵”本文は評論家・村井康治さんがお書きになり、項目末の『響庵の30枚』のセレクトとコメントは私が記述したものです。」

同封されてきた一冊の本は「面白いほどよくわ

かるジャズの名演 250」。モダンジャズ黄金期を彩るプレーヤーの名演を徹底的に紹介した本であるが、全体の70%を大木さんが執筆されており、単に曲目を紹介するだけでなくプレーヤーの歩んだ人生を絡めた読み物として、ジャズファンにはこたえられない一冊となっている。これからの私にとってジャズ鑑賞の絶好の教科書となるに違いない。

そして、追伸として次のことが書かれてあった。

「昨年6月からブログを開設しました。昨今、出版界は冷え込んで印刷による発表が見込めない、今まで収集してきたジャズ関係の映像や書籍を中心に、自分のジャズ感を述べたものです。」

早速ブログを開いてみると6編のジャズ評論が載っている。一編が投稿字数ぎりぎりの超長文(大木さん談)は力作揃い。きめ細やかな文章で当時のシーンを蘇えさせる文章はブログ『響庵通信』で検索できる。

私は元来ビッグバンド(スイング)・ラテン指向なのだが「ジャズは好奇心と観察力です」という大木さんの言葉を頭の片隅におき、これまで以上にモダンジャズにも関心を持つことにしようと思う。

大木さんのジャズに対する飽くなき追究はこれからも続くようである。

以上

